

「じゃない」について

1. 初級教科書での「じゃない」

初級の教科書では「な形容詞」「名詞」の否定の形として「じゃない」を習いました。

- ① 私はお酒が好きじゃない。
- ② 彼は学生じゃない。

「じゃない」の元の形は「ではない」です。書き言葉では、下記のように「ではない」を使う方が普通です。

- ③ 私はお酒が好きではない。
- ④ 彼は学生ではない。

「い形容詞」や「動詞」の否定では「じゃない」は使いません。

- ⑤×あの山は高いじゃない → あの山は高くない
- ⑥×明日、学校へ行くじゃない → 明日、学校へ行かない

2. 会話文での「じゃない」

話し言葉では、

<文>+「じゃない」・「じゃないか」、または

<文>+「んじゃない」・「んじゃないか」のような言い方があります。中級から学ぶ日本語ワークブックの第1課、第5課では、次のような形で出ています。

- ⑦ 熱でもあるんじゃない？
- ⑧ だって、私たちの体には、それが残ってるんじゃない？

上記で、⑦は質問で、⑧は相手に対して確認している文です。また、「じゃない」の前は<文>ではなく、<語>や<句>の場合もあります。

- ⑨ これは万年筆じゃない。僕はボールペンだと思っていたよ

上記⑤、⑥で誤りとしていた文も、下記のような状況での会話文では正しい言い方になります。

- ⑩ 「その靴はいくらですか」「2万5千円です」「え、それは高いじゃない」
- ⑪ 花子は昨日「熱があるから休む」と言っていたけど、結局行くじゃない。

この「じゃない」は、否定ではありません。⑩は「それは高いよ」「それは高いね」の意味になり、⑪は「結局行くんだね」「結局行くのか」の意味になります。どちらも、話者の予想または期待が外れた場合によく使われます。時には、相手の言動を非難する意味が含まれている場合もあります。

「違うじゃない」も下記のような場合には使えるということになります。

⑫ (小学生が間違っただけをしたとき)

それは違うんじゃない? もう少し考えてみてください。

⑬ (注文した製品と違うものが届いたとき)

あ、違うじゃない。注文したのは、これじゃないよ。

中級から学ぶ日本語ワークブックの第 11 課聴解 I の C では、「どこが違うの、同じよ」という文が出ていますが、これを「じゃない」を使って言い換える場合は、「違うじゃないの」ではなく「どこも違わないじゃないの」なら同じ意味になります。

3. 中級から学ぶ日本語ワークブックの聴解 I では

上記に示したように、第 1 課、第 5 課で「じゃない」が出てきていますが、それ以外にも第 7 課、第 10 課で次のような文が出ています。

⑭ 洗濯はこんな時間にするものじゃないよ (当然・一般的な傾向を表す)

⑮ なんだ、お父さんじゃない (予想外・落胆等を表す)